

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第49号

平成16年 4・5・6月



重要文化財 銅造如来及び両脇侍立像（法隆寺献納宝物143号） 東京国立博物館

特別展

法隆寺

—日本佛教美術の黎明—

4月24日(土)～6月13日(日)
東・西新館

平常展

佛教美術の名品

本館

中国古代青銅器

本館

法隆寺

—日本仏教美術の黎明—

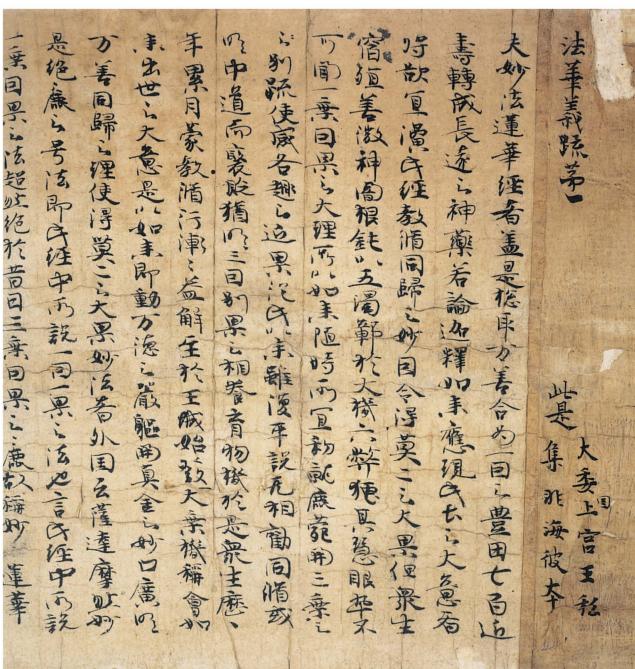
◆会期 平成十六年四月二十四日(土)～六月十三日(日)
 ◆会場 奈良国立博物館 東・西新館
 ◆主催 奈良国立博物館・朝日新聞社・NHK奈良放送局

日本に仏教が公けに伝えられたのは西暦五三八年とする説が有力です。記録によれば、このとき、朝鮮半島に分立していた三国のひとつ百濟の聖明王が、日本の朝廷に仏像・経論等を送り、仏教が優れた法であることを伝えました。この後日本では仏教を受け入れるか否かで争いが起きましたが、やがて仏教を奉ずる一派が勝利をおさめ、奈良・飛鳥の地で日本最初の伽藍・飛鳥寺(法興寺)が建立され、はじめて本格的な仏教文化が花開いたのです。

これとほぼ同時期、推古天皇の摂政として国政にあたっていた聖徳太子は、仏教を深く信奉し、これを研究して自ら経疏を著すなど、黎明期の日本仏教をリードしました。太子が、当時住んでいた斑鳩宮に隣接する場所に建てたのが斑鳩寺、すなわち法隆寺です。法隆寺は天智九年(六七〇)に焼失したとされますが、まもなく再建をとげ、世界最古の木造建築である金堂・五重塔をはじめ、堂内に安置された数多くの尊像や、様々な莊嚴具・仏具、また堂宇に葺かれた瓦など、最初期仏教美術の宝庫として、世界に輝く存在です。

本展は、これら法隆寺に伝来した文化財を中心として、美術作品を通じて、黎明期、すなわち飛鳥時代の日本仏教美術の種々相を紹介し、そこにあらわれた人々の信仰や美意識をさぐり、日本独自の表現が生成する歴史を追究しようという試みです。

飛鳥寺・法隆寺とともにその本尊像の作者は鞍作鳥(止利仏師)とされます。飛鳥時代を通じて仏教彫刻の主流様式となつたのがこの止利派の様式でした。止利様式の源流は朝鮮半島・百濟、ひいては南北朝時代の中国の仏像に求めることができます。本展では、これら止利派の源流をさぐるため、中国・韓国の作品も展示します。同時に、止利派の仏像のその後の展開にも目を向けています。



法華義疏 宮内序
飛鳥時代 7世紀

法華経の内容や語句を解釈した書物で、聖徳太子の真筆として大に伝えられてきた。丸みを帯びた平たい文字は6～7世紀頃のものと思われ、文中には字句の訂正や書き込みが非常に多いことから、完成した書ではなく草稿本と考えられている。



重要文化財 胡面水瓶 奈良 法隆寺
中国・唐時代 8世紀

丸みの強い卵形の胴に裾広がりの台脚を付け、尖台と呼ばれる細長い飲口付きの蓋を具えた響銅製の仙盡形水瓶である。胴側面の注水口に胡人の顔面を表現していることから、胡面水瓶と称される。



重要文化財 飛天図（金堂内陣旧壁画） 奈良 法隆寺

土壁著色 飛鳥時代 7～8世紀

東洋仏教美術の白眉とされる法隆寺金堂壁画のうち、内陣小壁を飾っていた飛天図二十面のみが制作当初の彩色を今に伝えている。飛天の姿形や謹直な輪郭線、着衣の隈取りなどは中国の初唐様式を採用したもの。



重要文化財 如来坐像(法隆寺献納宝物145号)

東京国立博物館

銅造鍍金 飛鳥時代 7世紀

飛鳥時代の仏像彫刻の主流であつたいわゆる止利派の作例だが、法隆寺金堂の釈迦三尊像に比べると、表情は柔和で、全体に丸みを感じさせるつくりである。頭頂の肉髻には切子形の螺髪を表し、地髪部は渦巻状に髪を表すという珍しい表現である。



国宝 四天王立像のうち多聞天像 奈良 法隆寺
木造彩色 飛鳥時代 7世紀

わが国最古の四天王像のうちの一軀。樟材。表面は彩色と切金を併用し、各所に金銅製の金具をはめる。本像と広目天像の光背裏に作者銘がある。『別尊雑記』所掲の四天王寺金堂の四天王像に図像がほぼ一致する。足下の邪鬼まで当初のものが伝わる。

展示評

外からみる奈良博

「七支刀と石上神宮の神宝」展を見て

滋賀県立大学教授 田中俊明

特別展「七支刀と石上神宮の神宝」が今年の一月四日から二月八日にかけて開かれた。石上神宮といえど、すぐに国宝の七支刀がすぐに思ひ浮かべられるほどに、両者の関係は広く知られている。わたしもこれまで七支刀は国宝展など何度か見る機会があった。しかし、今回の展示は、七支刀のみでなく、石上神宮が物部氏と関わり、武器・武具が多く奉納された宝庫であったというその歴史の一端をかいま見させる興味深いものであった。仁徳紀にみえる鉄盾に結びつけるみかたもあった鉄盾は、想像以上の大きさであつたし、鎌倉・室町になつても奉納される武具類が多かつたことも実感した。ただここでは、やはり七支刀についてふれたい。公開講座の六〇分では、とうてい話し尽くせぬ、ここでも分量的に無理であるが、久しぶりに見て、あらためて考えたことがある。

何をおいても重要なものは銘文である。その釈読しだいで、刀のもつ意味がまったく変わってしまう。金象嵌の金が剥落し、X線によつても、また拡大写真によつても判読不能な部分が少なくない実情は、実際に目視したところでわかるはずもない。しかしきできあがつた刀に文字を彫るときに圧力を加えたのであるから、そうした分子組成?の分析ができるば、圧力の強弱によって生ずる差で、文字の復元が可能ではないか。刀自体を破壊することなく、そのような分析が可能になるのかどうか、それが問題であるが、今後に期待したい。

銘文の中で肝腎な箇所は年号である。今回も注視した。表の冒頭、泰につづく二字目である。宮崎市定著『謎の七支刀』の影響力は今なお極めて大きい。確かに読んでいて面白い。しかし面白くても、認めがたいところも少なくない。宮崎説では「泰始」である。二字目は肉眼でも禾扁の三画までは確認でき、女扁とみるには、相當に寝かさなければならない。実際、そのように復元するのであるが、それよりも、銘文を再発見した菅政友が泰始と読んでいることを重視する。なぜなら、泰和という読みは、

『日本書紀』に引きずられた意図的な読みであるのに対し、菅政友は純粹な目で読んだからという。『日本書紀』に引きずられた、というのは、『日本書紀』の神功撰政五年条(干支)運繰り下げ修正すれば三七二年)に七枝刀や七子鏡などを百済が献上してきたと記す記事がある。泰和四年は三六九年にあたり、三七二年に近い。それが引きずられたとする理由であり、実際にもその通りである。しかし菅政友が果たして純粹な目で泰始を導き出したかと云うと、それは疑問である。当時は『日本書紀』の紀年論争がなお決着をみていない時期で、神功紀五年は、修正しなければ二五二年にあたる。二字目を読みづらい女扁で読んだのは、一五二年に近い泰□を求めた結果とみるべきである。泰始四年(西晉)は二六八年で、少し差があるが、いちばん近い。決して予断を排して得られた釈読ではないのである。それでは信頼できない。『日本書紀』の七枝刀は、この七支刀を指していることにまちがいない。枝と支は同じ字とみてよい。しかも年代もずれなく解釈できる。『日本書紀』の記録と合致するものが、このように伝わるのは極めてまれで、それだけに価値が高まるのである。

『日本書紀』が献上とするのに対し、下賜だ、いや対等の立場で、という議論がある。百済は、先進の高句麗と対抗する困難な道を選んだため、南の加耶南部や倭国と同盟を結ぶ必要があった。実際に高句麗と激しい抗争をしている時期であり、三七二年には高句麗王を戦死させていた。倭に対する下の勢力とみなしたはずで、下賜したとみるのが基本であろう。ただそれは倭国がどううけとめたかということとは別である。それにしても、発掘の進む百済地域で類例が全く出土しないのは、よほど特殊な刀であったということであり、改めてそのような刀を贈つた百濟王世子近仇首や当時の百済の状況に思いを馳せないわけにはいかなかつた。

特集展示

「法隆寺伝法堂・乾漆造の諸尊像」を開催



◎木心乾漆阿弥陀三尊像(東の間)

奈良・斑鳩の法隆寺は、金堂・五重塔を中心とする西院伽藍と、夢殿を中心とする東院伽藍とで大きく分かれます。このうち東院伽藍の講堂に相当するのが伝法堂で、夢殿の北側の舍利殿及び絵殿のさらに北に位置しています。この建物はもともと仏堂として建てられたのではなく、聖武天皇の夫人橘古那加智の邸宅であったものが後に法隆寺へ寄進されたことがわかっています。ふつうの仏堂とちがつて床を板張りとしているのはこのためで、奈良時代の貴族の住宅建築の遺例としても重要なものです。

伝法堂はこのほど屋根の葺き替え工事が施工されることとなり、工事の間、堂内に安置されている諸尊像に一時避難していただかなければならず。三間の須弥壇上には三組の如来坐像及び両脇侍立像をはじめ、多くの尊像が安置されましたが、このうち堂内の中心的な三組の尊像であるこの三組が安置され、それがいつまでいたが、この間はひとまわり小さくて中尊は等身大です。中の間の像が大きく、中尊の坐高は約二二〇センチ、東の間はひとまわり小さくて中尊は等身大です。いずれも乾漆造ですが、中の間・西の間の三尊は脱活乾漆造、東の間は木心乾漆造で、造像技法が少し相違するので、三組がセットで造られたのではないことは確かです。中の間と西の間の三尊は作風も近く、同一工房で制作されたと思われますが、伝法堂がかつて解体修理された際、当初は一間の須弥壇しかなかったことがわかつていますから、中の間三尊と西の間三尊も当初から同じ堂内にまつられたとは考えにくいわけです。文献からも仏堂として寄進されたときの安置仏についてはわからないので、これらの諸像がかつて法隆寺内のどこに安置されたか今のところ謎とするしかないのが現状です。

(美術室長 岩田茂樹)

奈良・斑鳩の法隆寺は、金堂・五重塔を中心とする西院伽藍と、夢殿を中心とする東院伽藍とで大きく分かれます。このうち東院伽藍の講堂に相当するのが伝法堂で、夢殿の北側の舍利殿及び絵殿のさらに北に位置しています。この建物はもともと仏堂として建てられたのではなく、聖武天皇の夫人橘古那加智の邸宅であったものが後に法隆寺へ寄進されたことがわかっています。ふつうの仏堂とちがつて床を板張りとしているのはこのためで、奈良時代の貴族の住宅建築の遺例としても重要なものです。

三組の像はいずれも奈良時代後期の制作と考えられます。須弥壇上の安置場所に応じて、それぞれ中の間・西の間・東の間の三尊と呼びますが、中の間と西の間の像が大きく、中尊の坐高は約二二〇センチ、東の間はひとまわり小さくて中尊は等身大です。いずれも乾漆造ですが、中の間・西の間の三尊は脱活乾漆造、東の間は木心乾漆造で、造像技法が少し相違するので、三組がセットで造られたのではないことは確かです。中の間と西の間の三尊は作風も近く、同一工房で制作されたと思われますが、伝法堂がかつて解体修理された際、当初は一間の須弥壇しかなかったことがわかつていますから、中の間三尊と西の間三尊も当初から同じ堂内にまつられたとは考えにくいわけです。文献からも仏堂として寄進されたときの安置仏についてはわからないので、これらの諸像がかつて法隆寺内に安置されたか今のところ謎とするしかないのが現状です。

●公開講座 春季特別展 法隆寺－日本の仏教美術の黎明－

- 5月1日(土) 「国宝金銅灌頂幡について」 中野 政樹(ふくやま美術館館長)
 5月8日(土) 「法隆寺建築は飛鳥か白鳳か」 鈴木 嘉吉(奈良国立文化財研究所所長)
 5月15日(土) 「聖徳太子と飛鳥仏教の美術」 松浦 正昭(文化庁主任調査官)
 5月22日(土) 「飛鳥時代の絵画」 梶谷 亮治(当館学芸課長)
 5月29日(土) 「太子信仰と法隆寺の文化財」 東野 治之(奈良大学教授)
 6月12日(土) 「止利派の彫刻」 鶴塚 泰光(当館館長)
 ※時間: 13:30~ (開場は13:00) 会場: 講堂 定員: 200名 聴講無料

- 親と子の文化財教室「鎌倉時代の歴史と美術」受講者募集●
 ①5月8日(土) 《現地見学》 興福寺
 ②6月19日(土) 《現地見学》 東大寺
 ③7月17日(土) 《講座》 心に残る10人のお坊さん
 ④8月7日(土) 《講座》 お坊さんの収入源
 ⑤9月11日(土) 《講座》 水墨画
 ⑥10月9日(土) 《現地見学》 三十三間堂と六波羅蜜寺
 ⑦11月13日(土) 《現地見学》 西大寺(日本一の五輪塔)
 ⑧12月11日(土) 《講座》 まとめ-鎌倉時代の美術

*小学5・6年生、中学生と保護者を対象にした教室です。

*はがきまたはFAXで、「親と子の文化財教室参加希望」と明記の上、住所・氏名・学校名・学年・電話番号・同伴する保護者の氏名・参加希望の回(何回でも可)を記入して、当館教育室【〒630-8213 奈良市登大路町50 奈良国立博物館教育室 Tel:0742-22-4463、Fax:0742-22-7221】までお申し込みください。

*参加費は無料ですが、現地見学では実費が必要です。

*時間: 10:00~12:00 場所: 講堂 定員: 各回100名(先着順)

●作品解説●

- 4月28日(水) 「考古遺物が語る法隆寺造営と伽藍の変遷」 岩戸 晶子(当館研究員)
 5月12日(水) 「飛鳥時代の彫刻について」 岩田 茂樹(当館美術室長)
 6月9日(水) 「法隆寺金堂西の間天蓋について」 内藤 栄(当館工芸考古室長)
 ※時間: 14:00~ 会場: 講堂 定員: 200名 入館者は聴講無料

●展覧会日程●

	4月	5月	6月
本館	平常展(彫刻)・(中国古代青銅器)		
西新館		法隆寺展(4/24~6/13)	
東新館		法隆寺展(4/24~6/13)	

展示品の見どころ

菩薩半跏像

重要文化財
(法隆寺献納宝物155号)
飛鳥時代(7世紀)
銅造鍍金 像高38.0cm
東京国立博物館



東京国立博物館法隆寺宝物館には、御物四十八体仏と通称される小金銅仏群が所蔵されている。これらは明治11年(1878)に法隆寺から皇室に献納され、第二次世界大戦後に国に移管された319件のいわゆる法隆寺献納宝物に含まれるもので、わが国黎明期の彫刻史を研究するうえで、きわめて重要な作品群である。その作風はさまざまであり、朝鮮半島で制作されたとみられるものとわが国で制作されたとみられるものがあり、また時代的には6世紀にさかのぼる可能性のあるものから、8世紀初頭に入るとみられるものまであるなど、幅が認められる。奈良・橘寺から移された像がある程度含まれるとみられるが、伝来については必ずしも明瞭でない。

本像は三山形の大きな宝冠をつけ、踏み下げた左脚の膝の上に右脚を乗せ、榻座に腰掛ける半跏像だが、通常の半跏思惟像が右手の指先を頬に添えるのに対して、本像は右手を立て、手のひらを前に向けている。また、ふつうの菩薩像とは異なり、両袖が臂から下に大きく垂下する貫頭衣形式の着衣をまとい、さらにその下層に胸前に縁を円弧状に見せる筒袖の衣を着けている。このような形相は、しばしば指摘されるように、『別尊雑記』所掲の四天王寺救世觀音像の図像とおおむね共通するものである。四天王寺は言うまでもなく聖徳太子創建と伝える古寺で、その当初の安置仏はすでに失われているが、法隆寺や広隆寺など太子ゆかりの寺院に、上記図像に類似する形制をしめす平安～鎌倉時代の遺品が存在することを考慮

すれば、細部はともかく、同寺救世觀音像が図像に記録されたような特異な姿であったことは信用してよい。くわえて、制作期が最も近いと考えられる本像の存在は、四天王寺救世觀音像の成立(その当初の尊名は別にして)が飛鳥時代にさかのぼることをも推測させよう。

本像は宝冠背面と後頭部を除く全面に施された鍍金がよく残り、頭光を失うほかはほぼ完存といってよい。縦長の顔に鼻翼の張った強い調子の鼻を表し、口辺をやや持ち上げていわゆる古拙の笑み(アルカイックスマイル)を浮かべている。目は細く切れ長で、法隆寺金堂釈迦三尊像のような杏仁形の眼ではない(釈迦三尊像においても、脇侍は中尊に比べて目が細い)が、本像が止利派の系列に属する作品であることはまちがいない。宝冠中央にはパルメット文を入れた三角形を配し、その頂部に日・月を表すとみられる文様をおくこと、その両脇には半パルメットや火焰宝珠形をあしらう点など、細部の文様構成も金堂釈迦三尊両脇侍像と基本的に共通している。

(美術室長 岩田茂樹)

■開館時間 午前9時30分～午後5時、ただし毎週金曜日は午後7時まで
(入館は閉館の30分前まで)

■休館日 月曜日休館
(ただし5月3日(月、祝日)は開館、5月6日(木)は休館)

■観覧料金

	大人	大学・高校生	中学・小学生
平常展	一般 420円	130円	
団体	210円	70円	
特別展	大人 1,000円	700円	400円
団体	900円	600円	300円

*団体は責任者が弓率する20名以上。
*特別展料金で平常展もご覧いただけます。



[交通案内]近鉄奈良駅から徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅からバスで「氷室神社・国立博物館」下車すぐ

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒(90円切手貼付、宛名明記)を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。

 奈良国立博物館
Nara National Museum